

○閉校の言葉



長崎県立猶興館高等学校長
小野 俊文

これまでの大島分校を振り返ってみますと、地域からの要請を受けて、昭和25年5月30日に長崎県立平戸高等学校大島分校の設立が認可され、大島村立大島中学校に定時制普通科課程として併設されることになり、同年9月10日に1学級定員40名として創立開校しました。その後、昭和28年11月10日には長崎県立猶興館高等学校大島分校と改称され、昭和31年から42年3月までは普通科に加え、家庭科も併設された時期もございました。また、同時期、定時制課程から全日制課程へと移行いたしました。昭和61年には現在の校舎が完成し、更に平成15年度から離島留学制度が導入されヒューマニティスクールとして県内外からの留学生も受け入れてまいりました。今回の卒業生まで含めると1,455名が大島分校を巣立ちました。うち、離島留学制度による卒業生は34名となりました。自然が豊かで、人情味溢れる大島ならではの離島留学制度ではなかったかと思えます。

「小さいけれど日本一」のスローガンのもと、子どもたちは学習や部活動、様々なボランティア活動にと必死に頑張って参りました。近年の活躍では、平成11年11月に年3回の独居老人への弁当配付・交流会、高齢者への座布団配付、島内清掃活動などのボランティア活動に対して県教育委員会から特別教育功労者表彰、平成14年5月には過去10年間のボランティア活動に対して社団法人日本善行会から善行表彰、平成22年4月にはそれまでの大島分校の読書活動が評価され、文部科学大臣から読書活動優秀実践校の表彰を受けております。また、同年10月には本校が取り組んでいる郷土芸能「流儀」が文化財保護の功績により県教育委員会から感謝状をいただきました。

大島分校の生徒たちは、雨の日も風の日も、島内のバスも利用しないで、全員徒歩で通学しております。遠くから通学する生徒の中には片道1時間以上かけて通学している生徒もいました。このことが生徒たちの体力と精神力を鍛えることにもつながったのではないかと考えております。また、本校では無人購買というシステムをとっております。職員室前の廊下に文具等の陳列ケースを置き、必要な生徒はお金を入れ、商品を取るというシステムですが、品物とお金が合わないことはありません。これは生徒と学校との信頼関係があってこそ成り立つシステムだったと考えます。

閉校記念誌には多くの方々から寄稿いただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。いただきました文章に目を通しますと、先輩方が分校のためにとの熱い思いで心血を注がれた様子がひしひしと伝わって参り

ます。また、生徒として在籍された卒業生の皆様の文章からも、学生時代に必死に取り組んだこと、分校を懐かしむ声、残念に思う声がたくさん聞こえて参ります。
種田山頭火たねださんとうかの行乞ぎょうこつ日記にある「平戸は日本の公園である」のとおり、平戸はすばらしいところです。フェリーの中から見ると島々の景色も最高です。私も分校に出かける4年間に数十回フェリーに乗りましたが、いつも後部のデッキから景色を眺めております。平戸港を出て、右手には黒子島、広瀬灯台、左手には田助港、ツバ崎、度島、生月と何度見ても見飽きることがなく、このような美しい景色を独り占めするのはもったいないという思いでした。島内に目を移せば、国選定、重要伝統的建造物群保存地区となっている神浦の町並みや、島の最東端にある大賀断崖、四季折々に表情を変える美しい棚田など、海と緑と歴史の薫りがただよっております。慌ただしく毎日を過ごし、ともすれば本来の自分を見失いがちになりますが、このような自然豊かな光景を眺めるとふと我に返ることが何度もありました。

大島分校は、これまで岬に建つ常夜灯のごとく本校生徒の航路を導いてまいりました。少子化の波とはいえ、地域から学校の灯が消えることは大変寂しいことです。しかし、卒業生の皆様の母校に対する愛情の灯は消えることはない、確信いたしております。大島が第二の故郷となった生徒もたくさんおります。長崎県の公立高等学校最後の分校として、62年間の幕をおろします。これまで、温かい大島の皆様方の支えがあってこそこの大島分校であったと心より感謝申し上げます。

最後に、本校の卒業生が、国内外で社会のために活躍され、一人ひとりに幸多からんことを心より祈念して閉校の言葉といたします。

「小さいけれど日本一」の大島分校、これまで本当にありがとう、そして、さようなら。